



Title	平安後期・鎌倉時代物語を相手にして
Author(s)	大槻, 修
Citation	大阪大学古代・中世文学研究会会報. 1985, 1, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67224
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

平安後期・鎌倉時代物語を相手にして

大槻 修

まずは回想録から。ジャーナリズムの世界に十
年近く、やっと学問研究の場に戻ろうと、昭和四一年、大阪大学大学院（修士課程）に入学した。学部卒業時に「狭衣物語」を扱った関係上、引き続き平安後期物語に情熱を燃やすべく、文学部資料室の書架でフト目に止まつたのが古典文庫本「在明の別」（まさに宿命的な出会いと申すべきか。悪戦苦闘の末、巻三冒頭部分の錯簡を証明し、天理図書館報「ビブリア」第三四号に発表、いわば学会へのスターを切つた形）。これが機縁で当時名古屋大学の松村博司先生を初め、中京の諸先生の指導を受け、「在明の別錯簡攷」を祝して、高木市之助先生はじめ連名の「雲牀会賞」を賜つた（その中身は名産きしめんのも懐かしく有り難い思い出である。昭和四年一月、修士論文「在明の別についての研究」を提出（一部に「サイメイノベツ」て何や？）の声あり）、翌年、松村博司・石川徹両先生のご尽力あって、同題にて桜楓社より刊行、当時ご在職の林和比古先生還暦を祝し、犬養孝先生の題簽をかたじけなくした。大学院博士課程に進んだ初夏、「在明の別」作者に関して中古文学会発表、こうして平安後期

・鎌倉時代物語の研究は軌道に乗り始めた。山岸徳平・松尾聰両先生の知遇を受け、五年後に「あさぢが露の研究」（昭和四九年）を刊行、その間、当時天理大学の中村忠行先生のご支援を賜つてゐる。一院生たる者、一年間に二本は論考を活字発表しなくちゃダメ！！』と、語氣鋭く叱咤激励くださった一犬養先生、縦横に研究の場を提供くださつた林先生、一両師の絶大な支えを受けて、今の私がある。さて研究余滴。以後「松浦宮物語」「岩清水」「いはでしのぶ」「風につれなき」「苔の衣」「むぐら」「我が身にたどる姫君」「風に紅葉（春日山」「木播の時雨」「恋路ゆかしき大将」「小夜衣」「忍び音」「白露」「あききり」「葉月物語絵巻」、「兵部卿」「別本八重律」「松陰中納言物語」「夢の通ひ路」「夜寝覚（改作本）」と、つぎつぎ学部・大学院生を相手に読み続けてきた。神野藤昭夫・三角洋一・阿部好臣各氏（在京の俊秀ともども、のとも懐かしい。「夜の寝覚」四部構造に関する野口

元大・永井和子両氏の論、「狭衣物語」に関する三谷栄一氏の系統論など、今後も興味ある命題であろうし、「二巻本むぐら」、「あききり」、「苔の衣絵巻」の新出など解説を待つ対象は数限りなく多い。松尾聰・小木喬氏の知遇を受け、散逸物語復元の方法論を勉強したが、近時、樋口芳麻呂・三角洋一氏らの活躍は瞠目に倣しよう。かつて日本古典文学影印叢刊「物語二百番歌合・風葉和歌集桂切」の月報一四に拙稿「物語評論と物語二百番歌合」を発表したが、一部に樋口氏の成果をみる（同氏・平安・鎌倉時代散逸物語の研究）（ひたく書房）所収）よ

的である。ただ、昨今の論考の中に、いわば枝葉末節、重箱の隅を楊枝でほじくる類を見るが、確固とした自己の研究視座を持たねばなるまい。加えて、言葉の遊戯的な、難解な語句の羅列による異様な文章を散見する。平明にして魅力的な文章一思わず読んでしまった、と感嘆させるような文を綴りたい、とこれも自戒の弁。

最後に蛇足ながら、この期の研究に適した参考文献として①「特集総覧・物語文学」（国文学解釈と鑑賞 五七五、昭和五五年一月、至文堂）、②「物語の視界—古典に躍る創意の群れ」（国文学解釈と鑑賞 五九七、昭和五六六年一一月、至文堂）、③「研究資料日本古典文学」①物語文学（昭和五八年九月、明治書院）を、まず掲げておきたい。（甲南女子大学）